

令和元年5月27日現在

機関番号：12601

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2016～2018

課題番号：16K13152

研究課題名（和文）現代精神医学の理論的基礎に関する哲学研究

研究課題名（英文）A Philosophical Study of Theoretical Foundation of Modern Psychiatry

研究代表者

鈴木 貴之（Suzuki, Takayuki）

東京大学・大学院総合文化研究科・准教授

研究者番号：20434607

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,200,000円

研究成果の概要（和文）：1.文献調査および研究会の開催を通じて、精神疾患の定義、分類、精神医学における諸アプローチの関係など、精神医学の理論的基礎に関してどのような原理的・哲学的な問題があり、どのような論点や立場が存在するかが明らかになった。2.東京大学で開催されているPPP研究会や京都大学で開催されているFundamentaへの参加を通じて、哲学的な問題に関心のある精神医学研究者との人的ネットワークを構築し、日本精神神経学会におけるシンポジウムなどの形で、研究交流の成果を発表することができた。3.ピーター・ザッカー氏の招聘を通じて、英語圏における精神医学の哲学研究者との人的ネットワークの構築に着手することができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

現代の精神医学においては、精神疾患とそうでないものをどのように区別するか、さまざまな精神疾患をどのように分類すべきか、生物学的アプローチや心理学的アプローチなどの多種多様な方法論はどのような関係にあるのかなど、さまざまな原理的な問題が存在し、いずれにも明確な解答が得られていないことが明らかになった。精神医学の理論的基礎を確立するためにはこれらの問題の解決が不可欠だが、そのためには、心の哲学や生物学の哲学など、現代分析哲学の隣接領域における研究成果が重要な手がかりとなることも明らかになった。

研究成果の概要（英文）：1. Through bibliographic studies and seminars, we identified what are the theoretical and philosophical issues concerning the foundation of psychiatry and what options are available for each issue. The issues examined include the definition of mental disease, the classification of mental diseases, and the relationship between the different approaches in psychiatry. 2. Through the participation to PPP Study Group and Fundamenta Study Group, we established the network with Japanese psychiatrists interested in philosophical issues. We presented the result of the collaboration with the psychiatrists at the two symposia of the annual meetings of the Japanese Society of Psychiatry and Neurology and other events. 3. Through hosting the international workshop of philosophy of psychiatry and inviting Professor Peter Zachar as the main speaker, we started to build the international network of the philosophers of psychiatry.

研究分野：心の哲学

キーワード：精神医学の哲学

1. 研究開始当初の背景

精神医学は、19世紀におけるクレペリンらの生物学的な研究にはじまり、精神分析の興隆を経て、薬理的な治療を中心とした現代精神医学へと変遷を遂げてきた。

近年、『精神疾患の診断・統計マニュアル(DSM)』の改訂などを契機として、この現代精神医学の理論的基礎を再検討する試みが、英語圏を中心として盛んになっている(たとえばOxford University PressのInternational Perspectives in Philosophy and Psychiatryシリーズなどを参照)。そこでは、精神疾患の定義や分類法など、現代精神医学の理論的基礎に関する問題があらためて活発に議論されている。現代精神医学においては、DSMに代表される操作的診断基準と、生理学的・心理学的・社会的要因すべてを考慮して精神疾患を理解しようという生物・心理・社会モデル(biopsychosocial(BPS) model)が支配的だが、これに対しても、ナシア・ガミー(『現代精神医学のゆくえ』、みすず書房、2012年)らが批判を展開している。とはいえ、これらの議論においては、心の哲学や科学哲学をはじめとする現代分析哲学の研究成果が十分に生かされているとは言い難い。精神医学の理論的基礎をめぐる諸問題の解明を進めるためには、現代分析哲学の研究成果を十全に活用することが必要なのである。

2. 研究の目的

本研究の目的は、以上のような問題状況をふまえ、現代精神医学の理論的基礎を確立するための基礎研究を行うことである。具体的には、(1)精神疾患の定義や生物・心理・社会という3レベルの関係など、現代精神医学の理論的基礎に関する諸問題の考察、(2)操作的診断基準と生物・心理・社会モデルを中核とする現代精神医学の標準的見解の妥当性の評価および代替的な見解の探究、(3)うつ病やパーソナリティ障害といった個々の精神疾患に関連する理論的問題の検討、という3つの主題について研究を進める。

なお、精神医学の理論的基礎に関する研究を進めるうえでは、精神医学の理論的基礎に関心をもつ哲学研究者と、哲学的問題に関心をもつ精神医学者の共同研究が不可欠である。そのために必要な人的ネットワークを確立することも、本研究プロジェクトの重要な目的となる。

3. 研究の方法

本研究の主な実施方法は、(1)精神医学の理論的基礎に関する諸問題を論じた文献の調査研究、(2)哲学研究者および精神医学者を講演者とした研究会の開催および関連する研究会への参加出席、(3)精神医学の哲学を専門とする海外の研究者を招いての国際ワークショップ等の開催である。

4. 研究成果

本研究のおもな成果は以下の通りである。

(1)ナシア・ガミーによるバイオサイコソーシャルモデル批判を手がかりとして、精神医学における生物・心理・社会という3つのアプローチの関係について検討した。その結果、3つのアプローチのいずれかのみを重視する立場も、すべてを併用する立場も説得的ではないが、方法論的な多元論を受け入れるならば、精神医学の学問的な統一性を説明することが困難になることが明らかになった。その成果は、日本精神神経学会学術総会における学会発表や、『精神神経学雑誌』掲載論文として発表されている。

(2)精神医学における生物・心理・社会という3レベルの関係を手がかりとして、精神医学の科学性について検討した。その結果、1つの現象を複数のレベルで理解するという図式は生物学などの自然科学においても一般的であるが、その領域に本質的な記述のレベルが明確でないという点や、複数のレベルだけでなく複数の説明様式が存在するという点で、精神医学は自然科学や身体医学と重要な点で異なることが明らかになった。その成果は、日本精神神経学会学術総会における学会発表として発表されているほか、近刊書籍の収録論文としても発表予定である。

(3)精神疾患とそうでないものの線引きや、さまざまな精神疾患の分類はどのようになされるべきかという問題について、ピーター・ザッカー氏の著作『精神病理の形而上学』の批判的検討を通じて考察した。その結果、一方で、精神疾患一般の本質主義的な定義は困難であるが、他方で、それぞれの精神疾患は何らかの生物学的なメカニズムの異常を本質とし、それにもとづいて一連の症状を理解することが可能であることが明らかになった。その成果は、国際ワークショップにおける研究発表などとして発表され、今後論文化を予定している。

(4)哲学研究者および精神医学者を講演者とした計5回の研究会を開催した。哲学研究者を講演者とした研究会では、生物学の哲学および統計の哲学に関する発表とその内容についての議論を通じ、精神医学の理論的基礎、とくに精神医学におけるレベル間の関係や精神医学の科学性を

考えるうえで、科学哲学の各領域における研究成果が重要な手がかりをもたらすことが明らかになった。精神医学者を講演者とした研究会では、生物学的精神医学と精神病理学の対比を通じて、精神医学には根本的に異質な方法論が並存しており、その調停は困難であるということが明らかになった。これらの活動の成果は上記の発表や論文などに反映されている。

(5)2018年12月に、オーバーン大学モンゴメリー校のピーター・ザッカー教授を招待し、精神医学の哲学に関する国際ワークショップを開催した。ワークショップでは、ザッカー教授の近著『精神病理の形而上学』についてのシンポジウムを行うとともに、ザッカー教授および日本の研究者が精神医学の哲学における諸問題について発表と討論を行った。

(6)成果(4)で述べた一連の研究会の開催や、その他の研究会への参加出席を通じて、哲学的な問題に関心をもつ国内の研究者との人的ネットワークを構築できた。その成果の一部として、研究代表者が共同編集者を務める論文集(榊原英輔・田所重紀・鈴木貴之編『精神医学と臨床心理学の哲学(仮)』新曜社)が2020年に出版予定である。

(7)成果(5)で述べた国際ワークショップの開催を通じて、海外の精神医学の哲学研究者との人的ネットワークの形成にも着手することができた。

本研究の実施期間中に研究代表者の所属機関が変更になったこともあり、研究計画の一部については十分に実施することができなかった。本研究の成果をふまえ、今後は以下の点に関してさらに研究を進めたいと考えている。

(1)本研究では十分な検討ができなかった個々の精神疾患に関する理論的諸問題の検討に取り組む。

(2)海外の精神医学の哲学研究者との人的ネットワークをさらに拡大し、海外学会への参加出席、研究発表などを行う。

(3)精神医学の哲学への関心を広く喚起するために、入門書を執筆する。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計1件)

鈴木貴之、バイオサイコソーシャルモデルと精神医学の統合、精神神経学雑誌、査読有、第120巻9号、2018、759-765

〔学会発表〕(計5件)

Takayuki Suzuki, Between Realism and Social Constructivism, Symposium on *A Metaphysics of Psychopathology*, 2018/12/1, The University of Tokyo, Komaba Campus.

鈴木貴之、本質主義的实在論と社会構成主義のあいだ、『精神病理の形而上学』出版記念シンポジウム、2018年8月11日、京都教育文化センター

鈴木貴之、精神医学の多元性と科学性、第114回日本精神神経学会学術総会、2018年6月21日、神戸国際会議場

鈴木貴之、バイオサイコソーシャルモデルの再検討、フンダメンタ、2017年9月23日、京都大学病院

鈴木貴之、バイオサイコソーシャルモデルと精神医学の統合、第113回日本精神神経学会学術総会、2017年6月23日、名古屋国際会議場

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

取得状況(計 件)

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究分担者

なし

(2)研究協力者

研究協力者氏名：村井俊哉

ローマ字氏名：(MURAI, Toshiya)

研究協力者氏名：田所重紀

ローマ字氏名：(TADOKORO, Shigenori)

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。